ピラミッド・テキストの研究

Studies on the Pyramid Text

吹田 浩 *
Hiroshi SUITA*

今日は「ピラミッド・テキスト」の研究というテーマで話をさせていただく。「ピラミッド・テキスト」と言うのは、まとまっているという意味で最古の宗教文書である。古い資料は他にもあろうかと思われるが、「ピラミッド・テキスト」はかなりまとまっている。その意味で最古のものと言えるであろう。最古のものは、古王国時代第 5 王朝のウニス王のピラミッドの内部に彫り込まれている。その後、第 6 王朝の王たち、あるいはその妻、そして最後は、第 8 王朝のイビ王に至るまで見つかっている。およそ紀元前 24 世紀頃のものになる。

この「ピラミッド・テキスト」は、ピラミッドの中に彫り込まれており、パピルスのようにペンで流し書きされたものではない。下書きをして、きちんと彫っている。また、王のために作られたものなので、大変作りが丁寧である。例えば新王国時代には、「死者の書」というのがある。これは大変有名であり、「ピラミッド・テキスト」よりも有名であるかもしれない。ただ、これはパピルスの上に書いている。そしてまた、王のために作られたものでもない。いわゆる私人のために書かれたものなので、書き間違いをはじめ、作りがいい加減になっている。「死者の書」をある程度の数、つまり代表的なものを読むだけなら問題ないが、「死者の書」を読んだと言える程度、つまり多数の「死者の書」を読むとなると大変なことで、多分それで一生終わってしまうであろう。そういう意味では「ピラミッド・テキスト」は、数はそれほど多いわけではなく、丁寧に作ってあるので、それほど手間はかからない。

一方で「ピラミッド・テキスト」が書かれた時期のエジプト語というのは、「古期エジプト語」(Old Egyptian) である。関西大学では古期エジプト語と言っているが、全くこだわりはない。日本では古エジプト語という言い方もされている。古期エジプト語というのは古典語と言われる「中期エジプト語」(Middle Egyptian) よりさらに古い時期のものである。中期エジプト語は、エジプト学を勉強する時に最初に勉強するものであり、古典語、いわば完成された体系を持っている。完成されたと言っても、今の我々から見ると、現代語では同じような訳にはならない。古代エジプト語の翻訳というのは人によってみな違い、我々が読む時には 3 つか 4 つくらい

* 関西大学文学部（Fuculty of Letters, Kansai University, Japan）

代表的な翻訳を並べ、なぜその訳が違うのか、この翻訳者はなぜそういう解釈をしたのかを考えながら読むことになる。

古期エジプト語は、中期エジプト語に比べても表記がまだまだ完成していない。また内容がピラミッドの中に書かれていて、亡くなった王の安寧を願う、極めて宗教的なものであるということからも難解である。そういう意味で、今日は「ピラミッド・テキスト」の内容がどういうものであるのかを、少しご紹介したい。

私は基本的にメイド・イン・ジャパンのエジプト学者である。カイロ大学で学位はいただいたけれど、関西大学で勉強してきた人間で、何とかエジプト学を国際的なレベルまで持って行きたいと考えている。私はもう手遅れのような気がするが、次の世代くらいには国際的な舞台で活躍するような人が出てきて欲しいと思っており、その捨て石くらいにはなりたいと思っている。その為になるべく欧米風の勉強をしたいと思ってきたわけだが、エジプト学者がどういう風に読んでいるのか、あるいは、どういう見方をしているのかということを、ごく簡単に紹介したい。それが一つと、それから「ピラミッド・テキスト」が具体的にどういう内容のものであるのか、ということも簡単に紹介したい。

「ピラミッド・テキスト」の中には、実は二つ有名なテキストがある。一つは、今日紹介する「共食い賛歌」である。これは呪文の第 273 番から第 274 番であり、実際には一つの呪文になっている。これはウニス王の「ピラミッド・テキスト」と次のテティ王の「ピラミッド・テキスト」の中に書かれているが、そのウニス王の「ピラミッド・テキスト」の中に入っている「共食い賛歌」を例に読んでみる。

もう一つ有名なのは、「宇宙創世神話」である。これは今回のウニスの「ピラミッド・テキスト」には入っていない。この「共食い賛歌」も「宇宙創世神話」もどちらも「ピラミッド・テキスト」を代表するものではあるが、一方で典型的なものでは決してない。「ピラミッド・テキスト」の中に書かれているのは、儀式に関連した呪文が多く、先ほど田澤先生のお話にあったように、エジプトの宗教というのは基本的に儀式中心である。そして神話では亡った王が来世で復活するためのプロセスが中心になっている。「共食い賛歌」も極めて異例で、「宇宙創世神話」も極めて異例であるが、ただ一般にはこの二つが代表的なものと言われている。今回このウニス王のものが一番古いものであるけれど、今年になってから、新しく翻訳というか、文法書が出たので、どうせなら新しい訳や解釈がある方が良かろうということで、「共食い賛歌」をご紹介させていただく。

私が院生であった頃、つまり 30 年以上昔には、インターネットのようなものは当然なかった。もっと言えば、パソコンの始まりの頃、今では見ないような古いパソコンが初めて出てきた頃であった。どうやって勉強するのかと言うと、めぼしい大学、この大阪で言うと、天理大学に沢山のエジプト学の本がある。あるいは、京都大学にも沢山のエジプト学の本がある。そういう大学の図書館を回って、その図書館で蔵書目録を見せてもらい、エジプトの本があれば、必要な部分をコピーしていた。30 年前のエジプト学の勉強というのは、いわば足で稼いでいたわけである。

私が２回生の頃、私の恩師である加藤一朗先生から、ブレステッドという大変有名な研究者の“ Development of Religion and Thought in Ancient Egypt ”（古代エジプトにおける宗教と思想の発展）という本を紹介された。大変それが面白かった。できるなら私は宗教とか文化とか、そういうものを勉強したいと、その後思う契機となった。そういう中で大学院生の頃、京都大学にゼーテの本を見つけた。Kurt Sethe の“ Die altägyptischen Pyramidentexte ”（古代エジプトのピラミッド・テキスト）であった。これは「ピラミッド・テキスト」のまさに象形文字のテキストをまとめた本である。これを見つけた時は大変うれしかった。これで「ピラミッド・テキスト」という史料が完結した形で手に入ったので、これで修論を書くことにした。「ピラミッド・テキスト」を全部読んで、それを翻訳して、その問題点を探して修論を書くというのが、私の修士論文であった。

今となったら追加の史料もあるが、とりあえず、ゼーテの「ピラミッド・テキスト」をまず読むのが基本である。これは象形文字だけである。その後同じゼーテが“ Übersetzung und Kommentar zu den altägyptischen Pyramidentexten ”（古代エジプトのピラミッドの翻訳とコメント）という本を出している。これも京都大学にあった。これは大変ありがたかった。翻訳となによりも難解な宗教文書に対するコメントまで付いていることで、これで修士論文が書けると喜んだのを覚えている。今であればインターネットもあれば、新しい情報も入ってくるけれど、当時としてはこの辺が精一杯であった。

その後マーサーが翻訳を出している。これも Translation and Commentary と書いてあり、翻訳とコメントが付いて、大変有り難い本であった。それからその後、ピアンコフも“ The Pyramid of Unas ”（ウニスのピラミッド）という本を出しており、ウニスだけだがピラミッド・テキストの翻訳をしている。そしてその後、レイモンド・フォークナーが“ The Ancient Egyptian Pyramid Texts ”を出した。これにはほとんどコメントはないが、その翻訳の影響力は英語ということもあり、大きかった。私が院生の頃はこういうもので勉強していたわけである。

その後、2005 年になって J. P. Allen の“ The Ancient Egyptian Pyramid Texts ”が出た。ここからかなり雰囲気が変わってきた。これまではゼーテの影響がすごく大きく、マーサーもゼーテの翻訳に近い感じがし、ピアンコフはちょっと独自性を発揮していたけれども、それほど大きく外れない。それからフォークナーも、だいたいゼーテに沿ったような訳をしていた。これが 1969 年以降の状況であった。ところが 2005 年になって、J. P. Allen が出てきてからかなり翻訳を大きく変えてきた。

かなり私にとってはショッキングなことで、またアプローチの方法も変わった。それまでは、何人もの王のテキストをまとめて「ピラミッド・テキスト」の呪文の何番と付けて、第何節と付けていたけれど、この辺りからウニスの「ピラミッド・テキスト」はウニスだけで翻訳する、テティのピラミッドはテティだけで翻訳するとように翻訳方法も変わり、アプローチの方法も随分大きく変わってきた。その後、キャリエのフランス語の本も出たが、これも同じでかなり翻訳を変えてきている。私の学生時代には、transliteration（関西大学では転字と言っているが、

全然これもこだわる気はない）は、古代文字を発音記号に変えるものであるが、それをちゃんと付けてくれるようになった。私が院生の頃は、大変苦労をして辞書をひっくり返したという記憶があるが、それもしないで勉強できるようになって、いい時代になったと思っている。

そして今年になってから、また J. P. Allen が、ウニス王の「ピラミッド・テキスト」に対しての文法書を出しており、その後ろには翻訳を付けて、また新しいシステムを出して来ている。ウニス王が今年出たので、ウニス王に入っている代表的な「共食い賛歌」についてご紹介したいと考えたわけである。

今挙げたくらいの文献は読んでいないと恥ずかしい。学部生はなかなか読めないかもしれないが、院生が修士論文でエジプト学を学ぶのに、英語・ドイツ語・フランス語が読めないとこれはちょっと恥ずかしい。皆様方はいろんな関心をお持ちであろうと思うが、エジプト学を本気でやるとなると難しい。本気でやると日本にエジプト学科がない。作ったとしても、出口論である。就職先がない。なので、学生が来てもらえるかどうか分からないという、大問題を抱える訳である。好きでやって来ても英語・ドイツ語・フランス語を読まないといけない。また、ギリシア語、ラテン語を読まないといけないと大変である。まともな勉強をしようとすれば、学生のうちは英語くらいで許しても構わないが、ドイツ語かフランス語かどちらかは欲しいと思う。最終的に修士論文くらいには英語・ドイツ語・フランス語は読まないと恥ずかしい。

今あげた文献が十分であるわけではない。しかし、最低限それくらい見ないで論文を書いたら、それは研究者としてはちょっと恥ずかしい、という感じのレベルが今のものになる。もし皆さんのなかに、学生時代にドイツ語とかフランス語を読まれた経験があるとか、あるいは少しこれから勉強してみようという気をお持ちであれば、ちょっとお読み頂ければと思う。少し難しいかもしれない。でもこれが、エジプト学の現状である。これができないと人前に出すのは恥ずかしいということになっている。

文法書の方もなかなか大変で、エルマン・エーデルが出版した“ Altägyptische Grammatik ”（古期エジプト語の文法）というのがあり、古期エジプト語の基本的な文法書なっていた。1955 年から 1964 年の出版で、私も修士論文の時に必死に読んだけれども、当時すでに足りないところがあった。どうするのかと言えば、1984 年に出版された J. P. Allen の“ Inflection of the Verb in the Pyramid Texts ”（ピラミッド・テキストにおける動詞の屈折）があり、これらの二つを組み合わせて勉強するというのがしばらく長く続いていた。私もだいたいそのつもりでやってきた。

ところが先ほど言った、アレンの“ Grammar of the Ancient Egyptian Pyramid Texts: Unis ”が今年出た。これは藤井先生から出たよと教えていただいて、買ってびっくり仰天したのであるが、全く違う文法書になっていたのである。J. P. Allen の先の本（ピラミッド・テキストにける動詞の屈折）は、彼の博士論文である。そこのテーマである動詞の Inflection とは、例えば英語でいうと -ed を付けると過去になるとか、そういうものをいうが、これを世界中の人間はメインで使ってきた。ところがこの 2017 年の文法書に書いてあるのは、「私のこの文法書のシステムは radically different」と書いてある。1984 年のものとは劇的に変化して違うと言っ

ているのであり、頭を抱えるばかりである。

ふと気が付くと、実は彼は数年前に Middle Egyptian（中期エジプト語）の文法書も出していた。これは第３版が今のところ最終版である。実はこのアレンという人は大変な天才というのは知っていたけれど、同時にいろいろ意見を変えるので、私は実はフォローしていなかったのであるが、１版、２版、それと３版とあり、この３版で劇的に意見を変えている。つまり、Inflection を否定しているのである。彼は博士論文で Inflection と言っているのに、その Inflection なんかないと言っているのである。

研究者というのは一応、書いたものに責任を持って原則変えないのものであるが、彼はコロコロと変えて行く訳である。大変ショックを受けて、頭を抱えているところであるが、これについて誰か詳しい人が言ってくれないかなと思っているのであるが、誰も世界中で書評も出していないし、今のところみんな困った状態なのであろうと思っている。ただここで申し上げたいのは、エジプト学というのは、こういうものであるということである。普通研究者であれば、一度自分が発表したものに責任を持つ。基本的にはそんなに簡単に変えていいものではない。でも、エジプト学の基本である文法理論においてさえ、コロコロ変わっていく。これが現状である。それだけなかなか難しい学問であると思う。

エジプト学科が日本にあればいいのであるが、私のように西洋史学の一員であるとか、他の学問の一人であるというのでは、絶対に欧米のエジプト学者には勝てない。やはりエジプト学者が３人、４人いて、学科があればこそ、なんとか欧米のエジプト学科に太刀打ちできるのであろうと思うが、肝心のエジプト語の文法書がここまで劇的に変わるのかというくらい変わって行くわけである。英語の文法は変わらない。100 年前の英語の文法書も、今の文法書も変わらないのである。

また余談をしてどんどん長くなってはいけないが、私がエジプト学を始めた頃、30 年前であるが、ガーディナーという研究者の文法書で勉強していた。そうすると、ポロツキーという研究者の文法理論が出てきた。これが「標準理論」と言われるくらい流行った。その理論がいわば行き過ぎてしまうと、今度はポストポロツキー理論というのが出てきたのである。

ポロツキーの理論では transposition がキーワードであった。これは、「品詞の変換」である。動詞というのは、動詞として使われない。動詞は、名詞と副詞に品詞が変換される。当時、30 年前の私にとっては、かなりショッキングであった。さすがに、動詞は動詞としては使われないと言われても困るので、動詞を復活させるというのが、ポストポロツキー派である。

私はそういう意味で Verbalist（動詞主義者）である。Verbalist は Verbalist なのであるが、Inflection（屈折）というのはあると思っている。いずれにせよ、たった 30 年の間にガーディナー、ポロツキー、ポストポロツキー、そしてアレンと４つの理論が出たことになる。これは良かれ悪しかれ、エジプト学の特色である。

辞書は、古いくから権威のあるエルマンとグラポウの“ Wörterbuch der aegyptischen Sprache ”（古代エジプト語辞書）があり、それから新しくはハニッヒの“ Großes Handwörterbuch: Ägyptisch –Deutsch ”を使う。残念ながらどちらもドイツ語である。学生、

院生さん、頑張って下さい。もし社会人の皆さんで頑張りたいという方がおられたら、どうぞといっていいのか分からないが、ちょっとドイツ語は本気でエジプトの文献をお読みになられるのであれば、避けて通れないなという気はしている。普通エジプト学を勉強している人間はフォークナーの " A Concise Dictionary of Middle Egyptian " を使う。これはいい辞書であるが、ただし、中期エジプト語 (Middle Egyptian) のみである。私は学生にはこれを買うように薦めている。院生になるとハニッヒを買うように薦めている。フォークナーは中期エジプト語を読む上では大変良い辞書であるが、今日読む「ピラミッド・テキスト」を読む上では全く不足している。

では、この呪文第 273 番から第 274 番、つまり「共食い賛歌」とも言われているが、王が神々や人間を食べて、彼らの力を奪って力強くなる趣旨の呪文の具体的な内容を紹介する。合わせてこの古い時期のエジプト語の特色、エジプト学者がどういう風に読んでいるのかということを紹介する。全てを扱うわけにはいかないが、代表的なものを出している。先程述べたが、翻訳は研究者によって違うのでそれらを並べて、なぜその研究者がそのように訳したのかという解釈の背景、あるいは文法上の背景を考えながら読んでいくことになる。文法理論については置いておくことにする。あのアレンが出てから、手が付けようがないのである。

まずウニス王のテキストが一番上にある。ゼーテのヒエログリフのテキストである。そして 393a と書いてあるのが節である。、273 から 274 というのが呪文の番号である。特定の呪文を扱う際には、普通、節の番号で該当箇所を指す。二段目には関西大学では転字と呼んでいるが、トランスリタレーション、発音記号がある。そして影響力は今でも強いゼーテの翻訳、それからマーサーの翻訳、フォークナーの翻訳、キャリエの翻訳、それからアレンの一番新しい翻訳、そして私の翻訳と並べている。アレンはちなみに、節を否定している。ここでは第 273 番から第 274 番の呪文の 1 行目という新しい表現を出している。合理的であるが、慣れていない人間には混乱をもたらす。

皆様は既にエジプト学に関心をお持ちと思うで、あまりくどくどとした説明は要らないであろうが、念のために申し上げておく。古代エジプト語のテキストには母音が書いていない。私が読んでみるが、これには流派があって関大の読み方とよその大学の読み方は違う。でも構わない。大事なのはお互いに通じるということである。関大流で読むと、ゲプ　ペト　イヒ　セバウ、こういう読み方をしている。

原則は古代エジプト語ではどこでも一緒で前に発音記号があって後ろに決定詞がくる。こういう書き方（𓃀𓊪）で、ここで言うとゲプ (*gp*) という発音記号（𓃀）があって、ここに決定詞（𓊪）が付いている。この決定詞は何でしょうね。天（𓇯）から雨が降って出たような何か縦棒がいっぱいぶら下がっている。この決定詞は曇っているという意味であろう。あまり使う字ではない。これ（𓉐）はペトと呼んで、これ（𓇯）が空の決定詞である。ここ（𓇋𓇋𓇋）はイヒと呼んで、これ（⋆）は表意文字であろうか。星が並んでいる。翻訳はそんなに大きな差はない。天は曇る。星たちは光を失う。多分この部分に関してはそれ程大きな違いは研究者のあいだにない。つまりこれから、ウニス王は神々や人間、そういうものを食べるわけであり、要す

るに通常の状態であるわけがない。まず、異常な状態が天におこるわけである。そういう状態を述べているのであろうと思われる。

次に 393b。ここもそれほど大きな訳の違いはないような気がする。大空は動く。大地の神々の骨は震える。大体そのような訳をしている。若干気になるのは、一番新しいアレンが、horizons としており、この訳は何であろうかと思うが、アケルウ、つまり大地の神々であるが、彼は地平線という訳をしている。しかも複数形である。地平線というのは一つの方が良いのであるが、あるいは古代エジプトでは二つの地平線があるが、彼は一体いくつ地平線があると考えているのか、気になる訳をしているが、そういう詳細はおいておくことにする。いずれにせよ、これから人を食べる、神を食べるため、異常な状態が続くことになる。そのような読み方をしている。

393c も大体同じような訳であるが、どうであろう。私は、歩みは止まると訳している。天は曇り、星は光を失い、歩みは止まる。この最後の部分で、「歩み」と訳したが、歩みは歩みだけれど単に歩みではない。たしかにテティ王のテキストでは足の決定詞を使っているので歩みなのであるが、もう少し具体的には何であろうか。ドイツ語を見ると、私と同じく歩みとしか訳していない。でもフォークナーは星の歩みという訳をしている。あるいは、アレンの新しい訳はデカンスで出てきますから、これも星である。直訳すれば歩みであるが、星の動きが止まるということなのであろうか。つまり、天変地異が起こるということになる。

そして 394a、全部は読まないが、マ・エン・セン　ウニス　カア　バー。資料ではいくつか赤線を入れている。それらはウニスが見た。彼が現れる。最後の現れるの部分は単純に appear と訳して構わないけれど、文字が地平線から現れる太陽（𓇼）を表しているように、言わんとするところは東の地平線から太陽が現れるように、普通に現れるのではなく、光り輝いているということである。普通にさりげなく現れたのではなく、オーラを持って現れる、光り輝いて現れているということになる。

問題はバー（𓅱）である。一般的には「魂」と訳されるが、ゼーテは力に溢れている (machtvoll) と動詞で訳している。あるいはマーサ―はバーとして、おそらく魂と見ている。フォークナーは machtvoll と同じで in power、力の中にある、としている。フランス語ではバーのまま、アレンは impressive とやはり（古代エジプト語の文法で）動詞で訳している。私も動詞でいいであろうと思っている。文法で言うと状態形である。王が光り輝いて、バーの力に満ち溢れているのを見て恐れているという場面を描写していると考える。このバーと言うのは、詳細に扱う訳にはいかないが、「魂」と訳すのが私に言わせるとばかげていて、これは典型的には、王が敵をやっつける、打倒する、そういう時の「力」を示すものである。

「魂」とは何であろうか。私はこの訳が大変気に入らない。日本人が思っている魂、中国人が思っている魂、アメリカ人もいろいろかと思うが、イギリス人、フランス人、古代エジプト人で、「魂」といってもみんな思い浮かべるものが違うわけである。「魂」と訳すなら、私は訳としてはなっていないと思う。ここで言う魂は、王が敵を打ち倒す時に、あるいは喧嘩する時に、という言い方がいいであろうか、体の中がカカカカと熱くなってくる、やられるかもしれない、

やるぞというあの力のことをバーと言う。これはもうテキスト上明らかと思っている。その代り一時的である。そのような過激な力は長くは続かないものである。ここでは、光り輝いて今にも人を殺そうとしている、そういう力で溢れて、亡くなったウニス王が現れてきたので、天変地異が起こったという解釈でいけると思っている。この辺でバーを魂と訳すのは、私としては逃げていると思うわけである。

後、細かいところで、マーサーは after で訳す。フォークナーとアレンは for で訳すが、for は昔風の英語表現で、今風に言うと because になる。これは問題ない。エジプト語の文法に立ち入る気はないけれども、after で訳そうが because で訳そうが、エジプト語文法上では全く何の問題もない。訳してみれば結局は同じことである。

「共食い賛歌」と言うだけあり、まだ続きがあって、394b では自らの父達を食べて生きる、母達を食する神として現れた、とある。このような時は、父親とか母親は複数形であるが、人とかを食べようとしており、普通の精神状態であるはずがない。したがって、バーの力でいいであろう。

ここにはウシェブ（𓋴𓏏𓅱）と書いてあるが、本当はこのような決定詞（×𓂝）が欲しい。𓂝は、口に手を当てていることから、口に関係があって、これで食べるということがわかる。×は小さくするとか、分けるとかそういった意味であったと思うが、小さく分けて口に入れるということである。こういう決定詞が無いのがまだまだ古期エジプト語の読みにくさになるわけである。このように、父親を食べ、母親を食べ、力が溢れ出てきたので天変地異が起こったのであろう。

おそらく、次の 397a からが本論に入ると思われる。ウニスは天の牡牛、心の雄々しき者、とあるが、これもいいかと思う。続いて、あらゆる神の存在を食べて生きる者である、と述べられている。父を食べ、母を食べ、さらに一つ食べるのがケペル（𓆣）であるこの文字は甲虫を表しており、これ（𓆣）だけでケペルと読み、振り仮名で *r*（𓂋）が付く。これ（☥）はアンクである。生命という意味で、ここでは動詞として使われている。前置詞の *n*（𓈖）があるので、これはケペルにつけて使われている。ケペルは、本来は生まれるとか、成長するとかを意味するが、ここでは名詞である。すべての神々の存在、ではいい訳と思わないが、あらゆる神々の存在を食べる、となる。ケペルは、日本語でどう訳していいのか、難しい。本質と訳す手もある。相手から手に入れるのに、存在や本質以上にいいものはないであろう。父親たちを食べ、母親たちを食べ、そしてあらゆる神々たちの存在（本質）を食べて、生きるということである。

それから少し飛ばして、398a。これは、ウニス　ピ　アペル　イブ　アクウ・エフと関大では読んでいる。お互いに通じればいいのであって、たぶん私の発音でも世界中に通じると思うし、世界中の誰かが言っている発音も私は一応理解できる。ウニスは呪文を供えられた者、自らのアクの力をまとめる者である、とある。アペルというのは備えるという意味であるが、備えるのは何かというと呪文である。「口を供えられた者」という言い方をよくする。つまり、死んだ後、呪文を唱えて何でも問題を解決できるという意味である。その呪文の力は何かとい

うと実はアクとなる。

アケトというのは多分ご存じと思うが、地平線である。思い浮かべて頂くとわかる通り、東の地平線は光り輝く新しい生命が生まれる場所である。日本人でも東の地平線に向かって、お正月に富士山に登られてご来光を拝むというようなことがあるので、何か東の地平線というのはそういう力を持っているのであろうと思う。そういう光、何か神々しいものである。それは東の地平線というだけではなくて、勉強や学問にも関係している。ここでは呪文と関係しているのですが、勉強した時、頭の中が閃くことがありますか。私は全然閃かないが、それでも何年か勉強していると、分からなかったことがパッと閃くことがある。頭の中に光が入る時がある。アク（𓎛）というのは地平線の光のように、本来光輝くということで、これは知識と結びついている。したがって、呪文を唱えたら、自らの知識の力をまとめる者になる。これで十分意味が通じるかと思う。

しかしここの訳を見比べると、最初のゼーテはガイスター（霊たち）、あるいはマーサーとフォークナーはスピリッツ（霊たち）を集める者としている。私にはさっぱりイメージがつかない。私は修士論文でテキストを端から端まで読んで、どこに問題点があるのかを探して論文を書いたが、一番問題があるのは、こういうバーとかアクとか、常識的に「魂」や「霊」と訳されていた言葉が分からなかった。研究者たちは「魂」とか「霊」とか訳すけれど、何をイメージしていいのか分からない。どうやって霊を集めるのか、何のために集めるのか、さっぱりわからない。

そして、新しいフランス語からみると、アクの力 (puissance-akh) としている。プイサンス (puissance) は力で、これは納得できる。私もこちらの方である。そして、一番新しいアレンも effective としており、これも力に関連しており、同じである。したがって、やはりこれは知識の力、知恵の力を集めると考える。死んだ後、父を食べ、母を食べ、そしてあらゆる神の存在（本質）を食べ、何のために食べるのかと言うと、彼らの知識を集めるためである。

397b では、彼らの内臓を食べている。どうして食べるのかというと、彼ら、これは神々かと思うが、彼らの腹が魔法の力で満たされてここに来ていたからである。だから食べる。その訳で、私は良いかと思う。ただ他の人の訳を見ると結構違っていて、「彼らが来た後で」とか「それが来た時に」とか、フォークナーに至っては even of those who come、と全く違う訳となっている。アレンは、whenever they have come、私もこれでいいじゃないかという気がしている。解釈の問題であるが、*iww* というのは分詞ではなくて状態形でとっていいかと思う。そうすると意味が通る。内臓を食べる。何の内臓を食べるのかというと、その内臓の中に、彼らは魔法の力を蓄えているわけで、それを食べることによって、自らのものにするのである。

要するに、英語やフランス語やドイツ語のテキストの場合は、書いてある通り文法が分かれば読める。しかしエジプト語の文法はそうではない。前後関係によって、やはり揺れが結構ある。かなり幅広い訳をすることが可能で、先ほどから私が、この理由があるからこちらの訳の方が良いとか言っているが、そういう前後合わせて訳が決まっていく。それができるかどうか、なぜ研究者がこのような訳をしたのかを考えて、それは意味が通らないとかが自分でできるか

どうか大事である。霊を集める、霊を食べる、ちょっと頭に思い浮かばない、という気がしているわけである。

次は、396 c。私の訳は、ウニスの導きの蛇。これは直訳である。彼の額にいる、とある。エジプトの王の額には蛇がいる。つまり、彼がバーの力に満ちているのを見る者である。うなだれていたとしてもアクの力が満ちている者である、と続けてみた。私の訳は先行者たちのものと違っている。一番古いゼーテの訳では、王の額についている導きの蛇 (*sšmwt*) が、敵の魂（バー）を見る者、としている。つまりここにいる王の蛇の前に敵がいて、その敵の魂（バー）を見るらしい。私は「ピラミッド・テキスト」を端から端まで目を通したが、敵が魂（バー）をもっている例を、他に見たことがない。魂と訳すためあまりよく分からないと思うが、バーというのは先ほど述べた通り、敵を打ち倒す力である。新王国時代の戦争の場面とかを見てもらったらよく出てくるが、敵を打ち倒す時に王が使うのがバーの力である。だから単に魂と思うと、大間違いである。敵がこのような力を持っていたら、王は困ることになる。これはちょっとありえないであろうと思っている。ここに「敵の」と補うのはちょっと難しかろうと思う。マーサーも同じで、敵の魂と訳している。

面白いのはアレンが impressively と訳している。やはり「魂」ではおかしいと思ったのであろう。バーを見るというのはおかしいと思って、impressively にした。しかし、これが実は分からない。文法の話をする機会ではないので、もし関心をお持ちであれば、来年出来るかどうか分からないがエジプト語講座をするので、お越しいただければと思う。これをどうやれば impressively になるのか、実はちょっと困っている。私はとりあえず状態形にして、彼、つまりウニス王がバーの力に満ちているとした。つまり額に蛇がついているわけで、ウニス王自身が今から敵ではないが、父母、神々を食べるので、その力に満ちているという状態形でとっていいのではと思っている。ただこれは世界中で私しかしていないので、これがいいのかどうかは分からない。

この後ろの、アケト　アク　ネチェブ・エス、これも研究者によって解釈が違う。これをやっていると収集がつかなくなるが、うなだれたとしてもアクの力に満ちている者、で私としては説明がつくようにしたつもりであるが、100パーセントの自信を持っているわけではない。とりあえずこれでつじつまが合うかなというのが、一時的な力（バー）が満ちており、この蛇が力を失ったとしてもせめて知識の力（アク）だけは満ちている、という解釈をしてみた。人によって大きな揺れがある。エジプト学者として、こういうふうに考えて、こういう訳をしている。

私はここの公開の場所で、いわば適当にしゃべっているわけで、出版するときにはもうちょっと慎重になると思う。出版するときには、また違う訳になっているかもしれない。でもお許しいただきたいのは、アレンもそうであるように、エジプト学は、本来なら研究者は一度訳したらそんなに変えてはいけないけれども、やはり変わらざるを得ないというのも、エジプト学の特色であるわけである。

400a。ウニスは人間を食べる者、神々を食べて生きる者、とあるとおり共食い賛歌である。

こういうことが書いてあり、やはり普通のはずがない。ここに何が書いてあるかというと、𓅱𓄿𓏏 (*rmṯ*) とある。分かるからいいが、中期エジプト語ならこうのように（𓅱𓄿𓏏𓅓𓏏𓅓𓏏𓅓𓏏）書く。逆に言うと、中期エジプト語ではフクロウを書かない。フクロウを書かないので *rṯ* としか見えないが、このような書き方をする。そして、この最後に決定詞という、男性とか女性の文字があり、3本線を入れる。このピラミッド・テキストの部分では若干読みにくい。ここは分かるけれども、やはりここも古期エジプト語らしいところである。しかも、*rmṯ* という発音しか書いていないけれども、普通、ここは Menschen、men、(me)、people、と複数形で訳している。

ところが続くこれ（𓇋𓇋𓇋）は *nṯrw* である。この文字（𓇋）は神殿に立っている旗である。これが一つで神という意味である。神殿に旗が立っていて、そこがパタパタと揺れる、そこに神がいると、エジプト人は考えていた。エジプトでいう神とは、ワニの姿をしているとか、鷹、ライオンの姿をしているとかしているが、それらが神なのではない。実は田澤先生が宗教のお話をされたので、私は密かに恐れているのだが、田澤先生のお話はイギリス系のお話であって、私はドイツ系の影響を受けていて、若干雰囲気の差を感じるわけである。何回も言いますが、別に悪いというわけではない。アプローチの違いである。

神は、本来は神殿の旗がパタパタと揺れるところに現れている。つまりエジプト人にとって、神というのは本来姿のないものであって、それを何とか姿に表さないといけない。それゆえに、それを鷹やワニという表現をした。本来姿のないものだから、頭だけ動物で、体が人間でもなんの問題もないわけである。それは表現上の工夫である。

ここは神の文字が3つ並んでいるので、複数形である。ということは、パラレルな関係になっている。エジプト学の文献を読むときに、パラレルな関係を見抜くというのが読解の基本であり、先に見た「人間たち」はどう見ても単数形であるが、複数形でとるべきであろう。研究者たちが people、men という訳になっているわけである。これも、実際読むときにこのような読み方をしているという例の一つである。

402b。彼のために彼らの腹にあるものを引き出す者よ、とある。まあ残酷な話である。特に言うこともなかったような気がする。これが共食い賛歌の内容である。ただこれは本当に異例で、こういうものは他にはあまりない。

403c。ウニスは彼らの魔法の力（ヘカ）を食べる者とある。魔法の力とは何なのか。私もこれは昔から謎と思っている。それからアクの力を飲み込む者である。このような知識の力や魔法の力を食べて自分のものにするということである。だからガイスター（霊たち）は勘弁してほしい。霊魂を食べる。どうやって霊魂を食べるのか。霊魂はどんな形をしているのか。スピリットってどのような形をしているのか。どのように食べるのか。やはりここはアクの方が良いと思う。あるいは effective の方がいい。正確に言うと、知識、知恵の力である。一番有名な所はこの部分ではないかと思う。

404a。そしていよいよ食べることになるが、どうも差があるらしい。食べられる者のうちの大きな者は朝食のために。次、真ん中くらいの人間は夕食にされる。小さい者は夜食にしかならない。どうしてこのような文章を書くのか不思議に思うが、さらにひどいのは、年老いた

男と年老いた女はもう食べてももらえない。彼らの炉の炎、つまり燃やすための薪みたいになる。多少研究者の訳の違いがあり、ゼーテ、マーサー、フォークナー、キャリエのようにIncense（香）ならまだしも、アレンの訳では単に fire wood（薪）にしかならない。露骨といえば露骨な表現がなされているが、この部分も極めて有名な部分である。

411d。王は他にも存在（本質）とかあったが、彼がすべての神の認識能力（シア）を飲み込んだからである、と述べられている。もうすでに食べたけれど、他に何を食べるか。アクを食べて、魔法の力を食べて、後は飛ばすが、認識能力も食べた。ここの認識能力には決定詞が付いていないが、神の決定詞を普通は付ける。したがって認識能力と日本語にすると、いまひとつよくないと思うが、やはり神聖なもの、力、である。認識する力とかそういうものも食べて自らのものにしているのである。

413a。ゼーテ、マーサー、フォークナーは、ここで魂と訳している。キャリエとアレンはごまかしてバーにしている。何かおかしいと思っているため、バーのままにしているであろう。バーというのは敵を打ち倒す力である。そのような力をウニスが食べたので、ウニスの腹の中にある。彼らのアクの力もウニスのもとにある、要するに食べたということである。

413c。ウニスに食べられた影（クウウト、中期エジプト語ではシュウウト、複数形）も、魂の一種である。ヨーロッパに、影を失った男とかいう小説があるが、それは一種の魂ということである。

次の414aからが結論部分である。ウニスは地平線からしっかりと輝き現れる（カア　カア）。普通に現れるのではない。神聖なオーラに包まれて現れないといけない。普通に現れたのでは意味がない。そこで、結論部分では現れるという言葉を2回繰り返しているのであろう。それから次、これ（ ）がまた決定詞が無い。ゼーテ、マーサー、フォークナー、アレンは、安定していると訳している。フランス語のキャリエは隠れるとしている。決定詞がなければ、どちらの訳も可能である。安定しているという意味ならこの文字（ ）になる。意味からいうと、隠れても仕方がないので、確固たるとか安定しているという意味で良いのではと思う。

414b-cでは、「悪いことを行う者は破壊する力を持たない。この地の生者たちのなかにあるウニスの心の場所を。永遠に、永久に」。この辺が結論であろう。、あらゆる神々のいろんな力を奪って、ウニス王は安定して確立されているのである。

「ピラミッド・テキスト」は丁寧ではあるけれど、読みにくい。宗教的な内容であることに加えて、まだ文字を書きなれていない感じがする。また、文化によって当然特色はある。古代エジプト人は「力」に対する観念に敏感であった。バー、アク、魔法の力（ヘカ）、飛ばしたが、ウセルとか、カーとかいくつか出てきた。これらを機械的に、「魂」とか「霊」とかと訳したのでは理解にはほど遠い。私が修士論文でテキストを読んでいた時の印象であるが、読む時の実際の障害というのは、こういう「力」の概念を正確に理解できるのかどうかによる気がする。

ずいぶん昔、韓国の人は辛さに対して、いくつもの言葉があるということを聞いたことがある。しかし、日本人は辛いは辛いしかない。キムチとか唐辛子とか、いろんな辛さを日本人は辛いという一言で言う。同じように古代エジプト人は、力に対するものに敏感で、アク、バー、

影、魔法の力、ウセルとか、色々使いわけをしていた。それゆえに、それらを機械的に魂とかと訳してしまうと、実際のテキストの理解には及ばない、という気がしている。

私が今日ご紹介したかったのは、「ピラミッド・テキスト」では異例ではあるが、代表的な共食い賛歌の内容、それからそれを読むとき、エジプト学者がどういうつもりで読んでいるのか、をちょっと冒険しながら、紹介してみた。そしてその時に問題となるのは、エジプトの特色、宗教文書の特色として魂、霊ではなくて力であった。それは一時的な力、生命力、知恵の力、認識能力、そういった微妙な差を古代エジプト人は使い分けていた。その理解なくして、テキストの理解はできない。そういうことをやっていくのが私のやり方かなと思っている。少しでもその点をご理解いただければと幸いであると思っている。

ピラミッド・テキストの研究

―資料―

i）呪文第 273-274 番（共食い賛歌）
ウニス王（前 2404 年～前 2374 年）　第 5 王朝
テティ王（前 2374 年～前 2354 年）　第 6 王朝

ii）ピラミッド・テキストを持つ王たち
第 5 王朝のウニス王、第 6 王朝のテティ王、ペピ 1 世王、その妻アンクエスエンペピ、メレンレー王、ペピ 2 世王、その妻ネイト、イプート 2 世、ウジェベトニ、第 8 王朝のイビ王

iii）主要文献

a）ピラミッド・テキスト
Kurt Sethe, *Die altägyptischen Pyramidentexte*, 4 Vols. Leipzig, 1908-22.
※下記の象形文字は本資料からトレースしたものである。

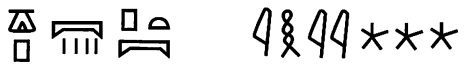
b）ピラミッド・テキストの翻訳
Kurt Sethe, *Übersetzung und Kommentar zu den altägyptischen Pyramidentexten*, 6 Vols,　Hamburg, 1935 - 1962.　＝ S
S. A. B. Mercer, *The Pyramid Texts in Translation and Commentary*, 4 Vols, New York, 1952.　＝ M
Alexandre Piankoff, *The Pyramid of Unas*, Princeton, 1968.
Raymond O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, 2 Vols, Oxford, 1969.　＝ F
James P. Allen, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Leiden, 2005.
Claude Carrier, *Textes des pyramides de l'Égypte ancienne, Tome 1: Textes des pyramides d'Ounas de Téti*, Paris, 2009.　＝ C
J. P. Allen, *A Grammar of the Ancient Egyptian Pyramid Texts: Unis 1*, Indiana, 2017.　＝　A　（引用文中の * は本資料中の注釈部分を示す）

c）文法書
E. Edel, *Altägyptische Grammatik*. Rom 1955/1964.
J. P. Allen, *Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, Malibu, 1984.

J. P. Allen, *A Grammar of the Ancient Egyptian Pyramid Texts: Unis 1*, Indiana, 2017.
J. P. Allen, *Middle Egyptian: An Introduction to the Language and Culture of Hieroglyphs*, 3rd edition, Cambridge, 2014.
H. J. Polotsky, "Les transpositions du verbe en egyptien classique," *IOS* 6 (1976), 1-50.（品詞の転換）

d）辞書

A. Erman, and H. Grapow (eds.), *Wörterbuch der aegyptischen Sprache*, Berlin, 1926 - 1961.
R. Hannig, *Großes Handwörterbuch Ägyptisch - Deutsch (2800 bis 950 v. Chr.)*, Mainz am Rhein, 1995.
R. O. Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962.



393a. *gp pt iḥy sbꜣw*

S: Der Himmel ist bewälht, die Sterne sind verdunkelt,
M: The sky is overcast, the stars are darkened,
F: The sky is overcast, the stars are darkened,
C: Le ciel est ennuagé, les étoiles sont obscurcies,
A(273-74.1): The sky is cloudy, the stars obscured;
吹田訳＝吹：天は曇る。星たちは光を失う。

393b. *nmnm pḏwt sdꜣ ḳsw ꜣkrw*

S: die Bogen bewegen sich, die Knochen der Akr.w zittern,
M: the bows are agitated, the bones of the earth-gods quake.
F: The celestial expanses quiver, the bones of the earth-gods tremble,
C: les phalanges célestes sont déployées, ont tremblé les os des Akérou
A(273-74.2): the stretches quake, the horizons' bones tremble;
吹：大空は動く。大地の神々の骨は震える。

393c. *gr r.sn gnmw*

S: die Bewegungen hören auf,

M: The agitations cease

F: the planets(?) are stilled,

C: (et) les errants sont devenus silencieux

A(273-74.3): and the decans, for their part, grow still,

吹 : 歩みは止まる。

394a. *m3.n.sn W ḫr b3*

S: nachdem sie den NN. gesehen haben, erschienen und machtvoll

M: after they have seen N. dawning (as) a ba,

F: for they have seen the King appearing in power

C: quand ils ont vu Ounas apparu pourvu d'un ba

A(273-74.4): for they have seen *me apparent and impressive

吹 : それらがウニスが輝き現れ、バーの力に満ちているのを見たからである。

394b. *m nṯr ʿnḫ m itw.f wšb m mwwt.f*

S: als der Gott, der von seinen Vätern lebt sich von seinen Müttern nährt.

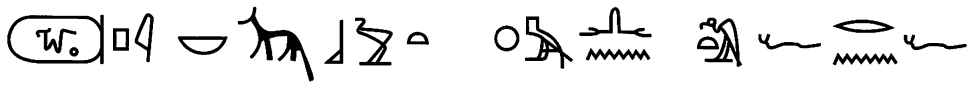
M: as a god, who lives on his fathers and feeds on his mothers.

F: as a god who lives on his fathers and feeds on his mothers;

C: tel un dieu vivant de ses aïeux (et) se nourrissant de ses aïeules

A(273-74.5): as a god who lives on his fathers and feeds on his mothers.

吹 : 自らの父たちを食べて生き、母たちを食する神として。



394c. *W pi nb z3bwt ḫm.n mwt.f rn.f*

S: NN. ist der Herr der Verschlagenheit (sAb.wt) dessen Namen seine Mutter nicht kennt.

M: N. is lord of craftiness, whose name his mother knows not.

F: The King is a master of wisdom whose mother knows not his name.

C: (car) ledit Ounas est un chef de meute dont la mère ignore le nom.

A(273-74.6): *I am a lord of jackal-like rapacity, whose identity his mother does not know:

吹：ウニスは、機敏さの主、自らの母が名前を知らない者である。

395a. *iw špsw Wnis m pt iw wsr.f m 3ḫt*

S: Die Ehre des NN. ist im Himmel, seine Macht ist im Horizonte,

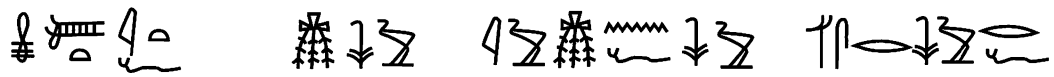
M: The honour of N. is in heaven, his might is in the horizon,

F: The glory of the King is in the sky, his power is in the horizon

C: La magnificense d'Ounas est dans le ciel (et) sa puissance est dans l'horizon

A (273-74.7): *my nobility is now in the sky and *my power is now in the Akhet,

吹：ウニスの高貴さは天にある。彼のウセルの力は地平線にある。



395b. *mi 'Itm it.f ms sw iw ms.n.f sw wsr sw r.f*

S: wie (die) sein(es) Vater(s) Atum, der ihn geschaffen hat. Er hat ihn geschaffen, so dass er mächtiger ist als er.

M: like his father, Atum, who begat him. He has begotten him mightier than he.

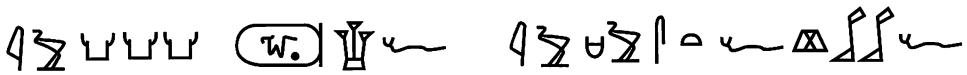
F: like his father Atum who begot him. He begot the King, and the King is mightier than him.

C: comme (celle d') Atoum, son père, qui l'a mis au monde: il l'a mis au monde (mais) il l'a surpassé en puissance!

A(273-74.8-9): like Atum, *my father who birthed *me — he has birthed *me, but *I am

more powerful than him;

吹 : アトゥム、彼の父、彼を生んだ者と同じように。彼は、彼を生んだ。彼は彼よりもウセルの力が強い。



396a. *iw kꜣw Wnis ḥꜣ.f iw ḥmwst.f ḫr rdwi.f*

S: Die kA.w des NN. sind hinter ihm, seine HmwS.wt sind unter seinen Füssen.

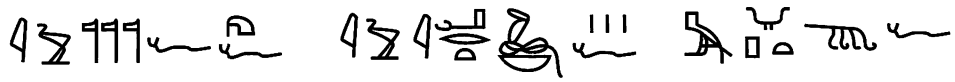
M: The kas of N. are behind him, his maid-servants are under his feet,

F: The King's powers are about him, His Hmwst are under his feet,

C: Les kas d'Ounas l'environnent, s(es) hémouset(s) sont sous ses pieds,

A(273-74.10): *my kas are now about *me, *my Hmwst now under *my feet,

吹 : ウニスのカーの力は彼の背後にある。彼のヘムウセトの力は彼の足の下にある。



396b. *iw nṯrw.f tp.f iw iʿrwt.f m wpt.f*

S: seine Götter sind über ihm, seine Uräusschlangen sind im Scheitel von ihm.

M: his gods are over him, his uraeus-serpents are upon his brow;

F: His gods are upon him, his uraei are on the crown of his head,

C: ses dieux sont (sur) sa tête, ses uræus sont sur son front,

A(273-74.11): *my gods now atop *me, *my uraei now on *my forehead;

吹 : 彼の神々は彼の上にある。彼のウラエウスの蛇たちは彼の頭頂部にいる。

396c. *iw sḫmwt W m ḥꜣt.f ptrt bꜣ ꜣḫt nṯb.s*

S: die Führerschlange des NN. ist an seinen Stirne, die die Seele (des Feindes) (durch)schaut, deren Feuerbrand wirksam ist.

M: the leader-serpent of N. is on his forehead, she who perceives the soul (of the enemy), (as)

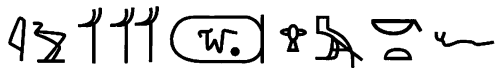
a diadem, a flame (?) of fire;

F: The King's guiding-serpent is on his brow, even that which sees the soul, efficient for burning(?);

C: la serpente guideuse d'Ounas est devant lui, contemplant le ba, (elle qui) est utile pour brûler:

A(273-74.12): *my lead uraeus is now in *my fore, she who looks impressively and is effective when she parches;

吹：ウニスの導きの蛇は彼の額にいる。（つまり）、（彼が）バーの力に満ちているのを見る者が。うなだれたとしてもアクの力に満ちている者が。



396d. *iw wsrw Wnis ḥr mkt.f*

S: Der Hals des NN. ist auf seinem Rumpfe (d.i. er hat den Koph auf dem rechten Fleck).

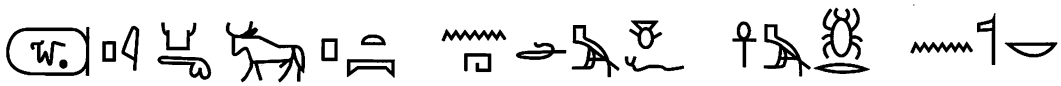
M: the might of N. is for his protection.

F: The King's neck is on his trunk.

C: la puissance d'Ounas est sa protection

A(273-74.13): *my power is now on *my proper place.

吹：ウニスのウセルの力は、彼の正しい場所にある。



397a. *W pi kꜣ pt n hd m ib.f ꜥnḫ m ḫpr n nṯr nb*

S: NN. ist der Stier des Himmels, der (einst) mangel litt und in sein herz gab, zu laben von dem Wesen jedes Gottes.

M: N. is the bull of heaven, who (once) suffered want and decided (lit. gave in his heart) to live on the being of every god,

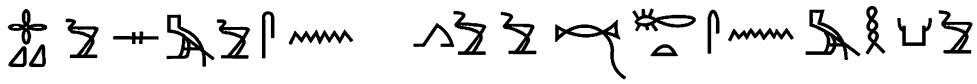
F: The King is the Bull of the sky, who conquers(?) at will, who lives on the being of every god,

C: (car) ledit Ounas est le Taureau du ciel qui charge à son gré (et) qui vit de l'être de chaque dieu,

A(273-74.14): *I am a sky-bull, with attacking in his mind, who lives on the evolution of

every god,

吹 : ウニスは、天の牡牛、心の雄々しき者、あらゆる神の存在を食べて生きる者、



397b. *wnm wzmw.sn iww mḥ ḫt.sn m ḥkꜣw*

S: der ihre Eingeweide(?) ass, nachdem sie dazu gekommen waren, dass ihr Seib gefüllt war mit Zauberkräften

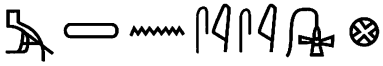
M: who ate their entrails (?) when it came (to pass) that their belly was full of magic

F: who eats their entrails(?), even of those who come with their bodies full of magic

C: mangeant leurs herbages, (eux) qui sont (re)venus, leur ventre rempli de magie-hékaou,

A(273-74.15): who eats their innards whenever they have come from the Isle of Conflagration with their belly filled with magic.

吹 : 彼らの内臓を食べる者である。彼らは、腹が魔法の力で満たされて来ていた。



397c. *m iw nsisi*

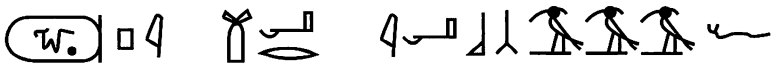
S: auf der Insel des Aufflammens.

M: from the Isle of Flame.

F: from the Island of Fire.

C: de l'Île de l'Embrasement.

吹 : 炎の島から。



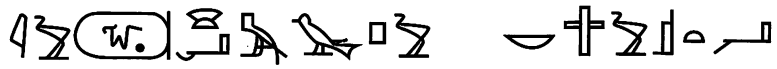
398a. *W pi ꜥpr iꜥb ꜣḫw.f*

S: NN. ist einer der wohl versehen ist, der sich die Geister einverleibt hat.

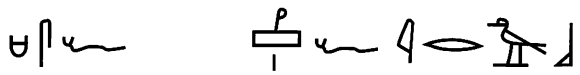
M: N. is equipped, he who has incorporated his spirits.

F: The King is one equipped, who assembles his spirits;

C: Ledit Ounas est bien pourvu (car) sa puissance-akh est réunie.
A(273-74.16): *I am an equipped one who collects his effectiveness,
吹：ウニスは、（呪文を）備えられた者、自らのアクの力をまとめる者である。



398b. *iw W ḫꜥ m wr pw nb imiw-st-ꜥ*
S: NN. ist erschienen als jener Grosse, der Herr der zu Händen seienden (imj.w-is.t-a.wj),
M: dawns as the Great One, lord of those with (ready) hands.
F: The King has appeared as this Great One, a possessor of helpers;
C: Ounas est apparu sous la forme de ce Grand, Maître des génies acolytes:
A(273-74.17): and *I have now appeared as the great one who has assistants,
吹：ウニスは、あの大いなる者、補助者の主として輝き現れている。



398c. *ḥms.f sꜣ.f ir Gb*
S: er setzt sich seine Seite gegen (d.i. Seite an Seite mit) Geb.
M: He sits, his side towards Geb (the earth).
F: He sits with his back to Geb,
C: c'est adossé à Geb qu'il siège!
A(273-74.18): sitting down with *my back to Geb.
吹：彼は、ゲブに背を向けて座っているので。

399a. *W pi wḏꜥ mdw.f ḥnꜥ imn rn.f*
S: NN. ist es, der rechtet (eig. dessen Wort gerichtat wird) mit dem, dessen Name verborgen ist (imn-rn-f),
M: It is N. who judges with him whose name is hidden,

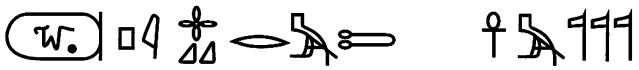
F: for it is the King who will give judgement in company with Him whose name is hidden
C: Ledit Ounas est celui qui a été jugé avec l'Innommé
A(273-74.19): *I am the one whose case against him whose identity is hidden was decided
吹 : ウニスは、名前が知られない者とともに判決を下す者である。

399b. *hrw pw n rḫs smsw*
S: an jenem Tage, da die Ältesten geschlachtet werden.
M: (on) this day of slaying the eldest (gods),
F: on that day of slaying the Oldest Ones.
C: en ce jour d'abattre l'Aîné.
A(273-74.20): on the day of butchering the senior one.
吹 : 年長の者たちを屠殺するあの日に。

399c. *W p nb ḥtpt ṯz ꜥḳ3*
S: NN. ist ein Herr der Opfergaben, der den aqA-strick geknüpft hat,
M: N. is lord of offerings, who knots the cord,
F: The King is a possessor of offerings who knots the cord
C: Ledit Ounas est un possesseur de provisions d'offrandes qui a noué la corde-âqa
A(273-74.21): *I am one who has contentment, who ties on the leash
吹 : ウニスは、供物の主、紐を結ぶ者、

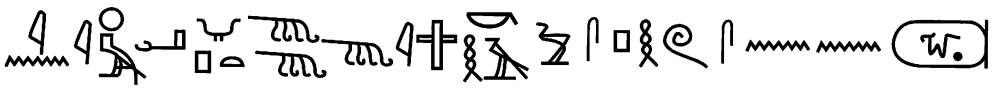
399d. *ir 3wt.f ḏs.f*
S: der (sich) sein Mahl selbst bereitet hat.
M: who himself prepares his meal.

F: and who himself prepares his meal;
C: (et) qui a préparé son repas lui-même.
A(273-74.22): who makes his spread himself.
吹 : 自ら供物を作る者である。



400a. *W pi wnm rmṯ ʿnḫ m nṯrw*
S: NN. ist einer, der Menschen isst und von Götten lebt,
M: N. is he who eats men and lives on gods,
F: The King is one who eats men and lives on the gods,
C: C'est ledit Ounas qui mange les hommes, qui se nourrit des dieux,
A(273-74.23): *I am one who eats people and lives on gods,
吹 : ウニスは、人間を食べる者、神々を食べて生きる者、

400b. *nb inw ḫ3ʿ wpwt*
S: ein Herr von Boten, der Aufträge erteilt.
M: lord of messengers, who distributes orders.
F: a possessor of porters who dispatches messages;
C: possesseur de porteurs qui distribue les tâches!
A(273-74.24): one who has fetchers and sends off dispatches.
吹 : 使者たちの主、文書を送る者である。



401a. *in i.ḫmʿ wpwt imi kḥ3w spḥ sn n Wnis*
S: Der Tacker der Scheitel, der in den……. ist, ist es, der sie mit dem Lasso fängt für NN.
M: It is "Grasper-of-the-top-knot" who is in kHA.w who lassoes them for N.

F: It is Grasper-of-topknots who is(?) Kehau who lassoes them for the King;

C: C'est l'Empoigneur-de-toupets, le Préposé-à-la-marmite, qui les attrape au lasso pour Ounas!

A(273-74.25): Seizer of Forelocks in kHAw is the one who lassoes them for *me;

吹 : ケハウにいる前髪をつかむ者は、ウニスのために彼らを投げ縄で捕らえる者である。

401b. *in ḏsr-tp z33 n.f sn ḫsf n.f sn*

S: Die Schlange mit erhabenem Kopf ist es, die sie ihm bewacht,

M: It is "The serpent with raised head (dcr-tp)" who watches them (the gods) for N. who repels them for him.

F: It is the Serpent with raised head who guards them for him and restrains them for him;

C: C'est le Serpent-à-tête-dressée qui les surveille pour lui (et) les tient en respect pour lui!

A(273-74.26): Sweeping Head is the one who guards them for *me and bars them for *me;

吹 : 頭を持ち上げた蛇は、彼のために彼らを抑える者、彼のために彼らを罰する者である。

401c. *in ḥr-ṯrwt ḳ3s n.f sn*

S: der welcher über der Rötung ist, ist es, der sie ihm fesselt,

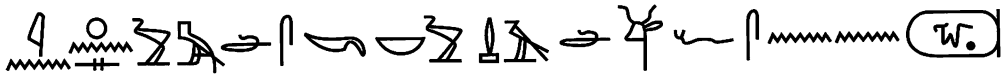
M: It is "He who is upon the willows" who binds them for N.

F: It is He who is over the reddening(?) who binds them for him;

C: C'est le Chef-du-rouge qui les bride pour lui!

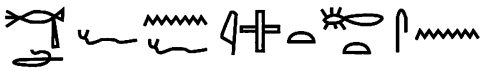
A(273-74.27): Gore-Covered is the one who binds them for *me;

吹 : 赤の上にいる者は、彼のために彼らを縛る者である。

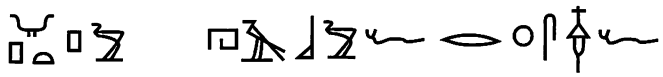


402a. *in ḫnzw mds nbw ḏ3d.f sn n W*

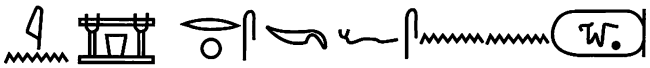
S: Shonsu ist es, der die Herren mordet, indem er sie für NN. abkehlt
M: It is "Khonsu who slaughters the lords (gods)," in that he beheads them for N.,
F: It is Khons who slew the lords who strangles them for the King
C: C'est Khonsou, le couteau des Seigneurs, qui les dépécera pour Ounas
A(273-74.28): Wanderer, the lords' knife-bearer, is the one who guts them for *me
吹：コンス、主たちを殺す者は、ウニスのために彼らを殺害する者、



402b. *šd.f n.f imt ḫt.sn*
S: und ihm herausnimmt, was in ihrem Seite ist,
M: and takes out for him what is in their body.
F: and extracts for him what is in their bodies,
C: (et) qui extraira pour lui ce qui est dans leur ventre!
A(273-74.29): and takes for *me what is in their belly—
吹：彼のために彼らの腹にあるものを引きだす者である。



402c. *wpt pw ḥ3bw.f r ḫsf*
S: der Bote ist das, den er (NN.) aussendet um zu strafen.
M: He (Khonsu?) is the messenger whom he (N.) sends forth to punish.
F: for he is the messenger whom the King sends to restrain.
C: Ce messager, il (l')enverra pour se faire respecter!
A(273-74.30): the messenger *I send to confront;
吹：あの使者を、彼は罰するために派遣する。

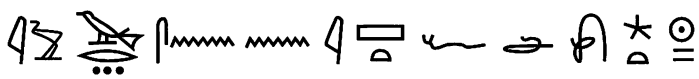


403a. *in ḫzmw rḫs.f sn n W*
S: Ssm.w ist es, der sie für NN. zerstückelt

M: It is ^sm.w who cuts them up for N.,
F: It is Shezmu who cuts them up for the King
C: C'est Chesmou qui les sacrifiera pour Ounas
A(273-74.31): Winepress is the one who butchers them for *me,
吹 : シェズムウは、ウニスのために彼らを虐殺する者、

403b. *fss n.f iḫt im.sn m ktiwt.f mšrwt*
S: und ihm ein Mahl kocht von ihren in seinen abendlichen Kochherden.
M: cooking for him a meal of them in his evening cooking-pots.
F: and who cooks for him a portion of them on his evening hearth-stones;
C: (et) qui en cuit pour lui un morceau sur ses fourneaux du repas du soir! A(273-74.32): who cooks a meal of them for *me on *my evening hearthstones.
吹 : 彼のために彼らから料理を彼の夕方用の窯で作る者である。

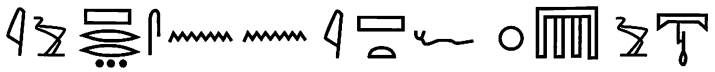
403c. *W pi wnm ḥkꜣ.sn i.ꜥm ꜣḫw.sn*
S: NN. ist es, der ihre Zauberkräfte isst und der ihre Geister verschluckt
M: It is N. who eats their magic and swallows their spirits;
F: It is the King who eats their magic and gulps down their spirits;
C: C'est ledit Ounas qui mange leur magie-hékaou (et) avale leur pouvoir-akh!
A(273-74.33): *I am the one who eats their magic and swallows their effectiveness:
吹 : ウニスは、彼らの魔法の力を食べる者、彼らのアクの力を飲み込む者である。



404a. *iw wrw.sn n išt.f dwꜣt*
S: Die Grossen unter ihnen sind da für sein Morgenmahl,
M: their Great Ones are for his morning meal,

F: Their big ones are for his morning meal,
C: Leurs adultes sont destinés à son déjeuner matinal,
A(273-74.34): their adults are now for *my morning meals,
吹 : 彼らの大きな者たちは、彼の朝食のためにある。

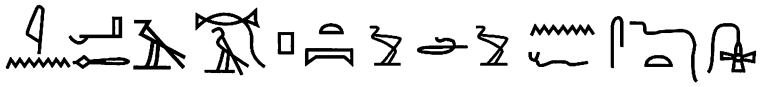
404b. *iw ḥrw-ib.sn n mšrwt.f*
S: die Mitteren unter ihnen sind da für sein Abendmahl,
M: their middle-sized ones are for his evening meal,
F: their middle-sized ones are for his evening meal,
C: leurs jeunes à son dîner,
A(273-74.35): their middle-sized ones for *my supper,
吹 : 彼らの中ぐらいの者たちは、彼らの夕食のためにある。



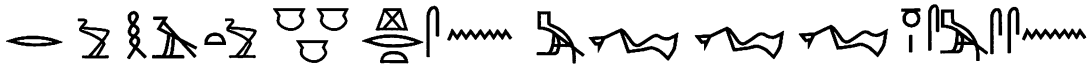
404c. *iw šrrw.sn n išt.f ḫ3w*
S: die Kleinen unter ihnen sind da für sein Nachtmahl,
M: their little ones are for his night meal,
F: Their little ones are for his night meal,
C: leurs petits à son souper nocturne
A(273-74.36): their little ones for *my nighttime meals,
吹 : 彼らの小さい者たちは、彼の夜食のためにある。

404d. *iw i3w.sn i3wt.sn n k3pt.f*
S: die Greise unter ihnen und die Greisinnen unter ihnen sind da für seine Räucherung.
M: their old men and old women are for his incense-burning (or, fire).
F: their old men and their old women are for his incense-burning;

C: (et) leurs vieux (et) leurs vieilles à sa fumigation.
A(273-74.37): their old men and old women for *my firewood.
吹 : 彼らの年老いた男と年老いた女は、彼の炉の炎のためにある。



405a. *in ꜥꜣtiw mḥtiw pt wdw n.f sḏt*
S: Die aus Mineral bestehenden, die im Norden des Himmels sind, sind es, die ihm Feuer anlegen
M: It is "The Great Ones in the north side of heaven" who lay for him the fire
F: It is the Great Ones in the north of the sky who set the fire for him
C: C'est le Grand des Septentrionaux du ciel qui lui allume le feu
A(273-74.38): The gemlike ones in the sky's north are the ones who set fire for *me
吹 : 天の東の大いなる者たちは、彼のために火を置く者たちである。



405b. *r wḥꜣwt ḫrt.sn m ḫpḫw nw sms.sn*
S: an die Kessel, die sie enthalten, mit den Schenkeln der Ältesten von ihnen.
M: to the kettles containing them, with the thighs of their eldest (as fuel).
F: to the cauldrons containing them with the thighs of their oldest ones.
C: pour les chaudrons qui leur appartiennent au moyen des cuis-seaux de leur(s) aîné(s)!
A(273-74.39): to the cauldrons containing them with the forelegs of their senior one;
吹 : 彼らを入れた鍋に。彼らの年長者たちの腿とともに。

406a. *iw pḫr imiw pt n W*
S: Die Bewohner des Himmels dienen dem NN.
M: The inhabitants of heaven wait on N.,
F: Those who are in the sky serve the King,
C: Le circuit des habitants du ciel appartient à Ounas

A(273-74.40): those in the sky now serve *me,
吹：天にいる者たちはウニスに仕え、

406b. *šsr.t n.f ktiwt m rdw nw ḥimwt.sn*

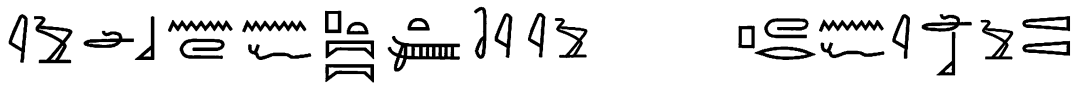
S: wenn ihm die Kochherde zusammengestellt werden aus den Füssen ihrer (der Ältesten) Weiber.

M: when the hearth was constructed for him with (out of) the legs of their women.

F: and the hearth-stones are wiped over for him with the feet of their women.

C: (et) on tisonnera pour lui les fourneaux au moyen des jambes de leurs femelles.

A(273-74.41): the hearthstones being poked for *me with the legs of their women;
吹：炉は彼のために彼らの妻たちの足でつつかれる。



406c. *iw dbn.n.f pti tm.ti iw pḫr.n.f idbwi*

S: Er hat durchwandert die beiden Himmel ganz, er hat durchzogen die beiden Sande (idb.wi),

M: He has completely encircled the two heavens; he has revolved about the two lands.

F: He has travelled around the whole of the two skies, he has circumambulated the Two Banks

C: Il a arpenté les deux cieux réunis (et) il a parcouru les Deux Rives.

A(273-74.42): both skies now circle for *me and the two shores now serve *me.
吹：彼は２つの天すべてを回り、彼は２つの岸を巡った。

407a. *W pi sḫm wr sḫm m sḫmw*

S: NN. ist die grosse Macht, die Macht, die Macht hat über Mächte,

M: N. is the great mighty one, who has power over the mighty ones.

F: for the King is a great Power who has power over the Powers;

C: Ledit Ounas est le grand puissant qui dispose des puissants.

A(273-74.43): *I am the most controlling power, who controls the controlling powers;

吹：ウニスは大いなるセケムの力ある者、セケムの力ある者たちに対してセケムの力ある者である。

407b. *W pi ˁšm ˁšm ˁšmw*

S: NN. ist der aXm-Falke, der die aXm-Falken überflügelt, der Grosse.

M: N. is the aXm-falcon, who surpasses the aXm-falcons - the great falcon.

F: The King is a sacred image, the most sacred of the sacred images of the Great One,

C: Ledit Ounas est une image, la première de(s) image(s) du Grand.

A(273-74.44): *I am the sacred image who is most sacred of sacred images:

吹：ウニスはアシェムの力ある者、アシェムの力ある者たちに対してアシェムの力ある者である。

407c. *gmy.f m wꜣt.f wnm.f n.f sw mwmw*

S: Wer von NN. gefunden sein wird auf seinem Wege, den isst er sich auf Stück für Stück.

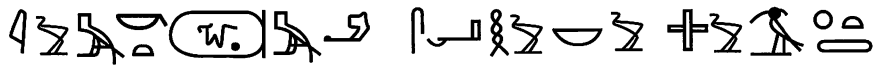
M: Whom he finds on his way, he eats for himself bit by bit.

F: and whosoever he finds in his way, Him he devours piecemeal(?).

C: Celui qu`il trouvera sur son chemin, il se le mangera morceau par morceau!

A(273-74.45): the great one *I find in *my way *I devour.

吹：彼が道で見出す者を、彼は自分のために生で食べる。



407d. *iw mkt Wnis m-ḥꜣt sˁḥw nbw imiw ꜣḫt*

S: Das Ansehen des NN. ist vor allen (anderen) Edgen, die im Horizonte sind

M: The respect of N. is before (first of) all noble ones who are in the horizon.

F: The King's place is at the head of all the august ones who are in the horizon,

C: La protection d'Ounas est supérieure à (celle de) tous les dignitaires qui sont dans l' horizon

(273-74.46)A: *My proper place is now in front of all the privileged ones in the Akhet.

吹：ウニスの正しい場所は、地平線の中にいるすべての高貴な者たちの先頭にある。

408a. *W pi nṯr sms r smsw*

S: NN. ist ein Gott, der älter ist als die Ältesten.

M: N. is a god older than the eldest.

F: for the King is a god, older than the oldest.

C: (car) ledit Ounas est un dieu, plus aîné que les aînés.

A(273-74.47): *I am the god who is senior to the senior one,

吹：ウニスは神、年長の者たちよりも年長である者である。

408b. *iw pḥr n.f ḫ3w iw wdn n.f šwt*

S: Ihm dienen Tausende, ihm opfern Hunderte.

M: Thousands serve him; hundreds make offering to him.

F: Thousands serve him, hundreds offer to him,

C: Des milliers lui sont revenus (et) des centaines lui ont été offertes

A(273-74.48): thousands now serve *me and hundreds now present offering to *me;

吹：数千（の者たち）が彼に仕える。数百（の者たち）が彼に供物を捧げる。

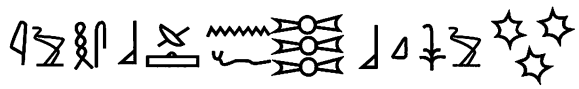
408c. *iw rḏi n.fˁ m sḫm wr in s3ḥ it nṯrw*

S: Ihm ist das Diplom (die Urkunde) als "grosse Macht" gegeben worden vom Orion, dem Vater der Götter.

M: A certificate as (of) a mighty, great one is given to him by CAH, father of the gods.
F: There is given to him a warrant as Great Power by Orion, father of the gods.
C: (car) lui a été donné un justificatif de puissance importante par Orion, le père des dieux.
A(273-74.49): *I have now been given title as the great control by Orion, the gods' father;
吹 : オリオン、神々の父によって、文書が彼に大いなるセケムの力ある者として与えられた。

409a. *iw wḥm.n W ḫʿw m pt i.f sbn m nb ꜣḫt*

S: NN. ist wieder erschienen (als König) am Himmel, indem er mit der oberägyptische Krone gekrönt ist als Herr des Horizontes.
M: N. has dawned again in heaven; he is crowned with the Upper Egyptian crown as lord of the horizon.
F: The King has appeared again in the sky, he is crowned as Lord of the horizon;
C: Ounas a renouvelé les apparitions dans le ciel (et) il a été couronné en tant que Seigneur de l'horizon.
A(273-74.50): *I have now reappeared in the sky and am now manifested as lord of the Akhet.
吹 : ウニスは天での輝く現れを繰り返した。彼が地平線の主として戴冠しているからである。



409b. *iw ḥsb.n.f ẖꜣzw bḳsw*

S: Er hat die Rückenmarkswirbel berechnet,
M: He has smashed the dorsal vertebra;
F: He has broken the back-bones
C: Il a compté les colonnes vertébrales
A(273-74.51): *I have now broken up the vertebrae of spines.
吹 : 彼は背中の椎骨を破壊した。

409c. *iw iṯn.f ḥꜣtw nṯrw*

S: er hat die Herzen der Götter genommen;

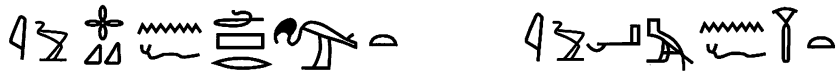
M: he has carried off the hearts of the gods;

F: and has taken the hearts of the gods;

C: (et) il s'est approprié les cœurs des dieux.

A(273-74.52): and *I have now acquired the gods' hearts.

吹：彼は、神々の心臓を奪い去った。



410a. *iw wnm.n.f dšrt iw ꜥm.n.f wꜣḏt*

S: er hat die Rote (Krone) gegessen, er hat die Papyrusfarbene (Krone) verschluckt.

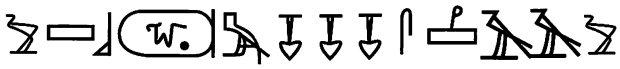
M: he has eaten the red crown, he has swallowed the green one;

F: He has eaten the Red Crown, he has swallowed the Green One.

C: Il a mangé le désert (et) il a avalé la verdure.

A(273-74.53): *I have now eaten the red and swallowed the raw;

吹：彼は、赤い冠を食べた。彼は緑の冠を飲み込んだ。



410b. *wšb W m zmꜣw sꜣꜣw*

S: NN. nöhrt sich von den Lungen, die weise sind,

M: N. feeds on the lungs of the wise ones;

F: The King feeds on the lungs of the Wise Ones,

C: (Si) Ounas se nourrit des poumons des sages,

A(273-74.54): *I feed on the lungs of the experienced

吹：ウニスは、知恵ある者たちの肺を食する。

410c. *ḥtp.f m ꜥnḫ m ḥ3tw ḥk3w.sn isṯ*

S: er befriedigt sich dadurch, doss er von den Herzen lebt, sowie ihren Zauberkräften;

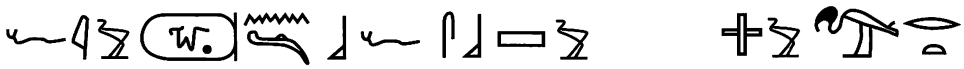
M: he is satisfied by living on hearts as well as their magic.

F: and is satisfied with living on hearts and their magic;

C: il sera satisfait de vivre des cœurs (et) de leur magie-kékaou alors que

A(273-74.55): and grow content from living on hearts and their magic powers as well;

吹 : 彼は、心臓とそれらの魔法の力で生きることに満足する。



411a. *fwi W nsb.f sbšw imiw dḫrt*

S: NN. ekelt sich, wenn er die Erbrechen verursachenden Stoffe, die in der Roten (Krone) sind mit der Zunge berührt

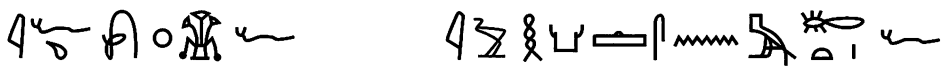
M: N. is disgusted when he licks the emetics which are in the red crown,

F: The King revolts against licking the sbSw which are in the Red Crown.

C: Ounas est dégoûté du fait qu'il doit lécher des déchets saignants abandonnés dans le désert.

A(273-74.56): *I get disgusted if *I lick the emetic parts in the red,

吹 : ウニスは彼が赤い冠にある気持ち悪いものを舐めるとき吐き気を催す。



411b. *i.f wꜣḫ.f iw ḥkꜣ.sn m ḫt.f*

S: er ergötzt sich (aber), wenn ihre Zauberkraft in seinem Leibe ist.

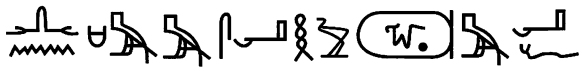
M: (but) he is delighted when their magic is in his belly.

F: He enjoys himself when their magic is in his belly;

C: Il prospère (car) leur magie-hékaou a pénétré son être.

A(273-74.57): but *I am becoming replete, now that their magic is in *my belly.

吹：しかし、彼は喜ぶ。彼らの魔法の力が彼の腹の中にあるからである。



411c. *n nḥmm sʿḥw W m ʿf*

S: Nicht werden die Würden des NN. von ihm genommen werden,

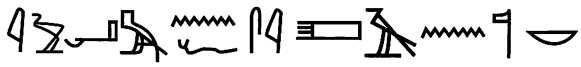
M: The dignities of N. shall not be taken from him,

F: The King's dignities shall not be taken away from him,

C: Les insignes d'Ounas ne lui seront pas enlevés

A(273-74.58): *My privileges are not taken from *me,

吹：ウナスの高貴さは彼から奪われない。



411d. *iw ʿm.n.f siꜣ n nṯr nb*

S: nachdem er das Wissen jedes Gottes verschluckt hat.

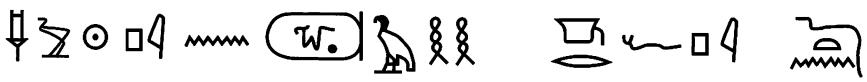
M: (for) he has swallowed the intelligence of every god.

F: for he has swallowed the intelligence of every god.

C: (car) il a assimilé la connaissance de chaque dieu.

A(273-74.59): now that *I have swallowed the Perception of every god.

吹：彼がすべての神の認識能力を飲み込んだからである。



412a. *ʿḥʿw pi n Wnis nḥḥ ḏr.f pi ḏt*

S: Die Lebenszeit des NN. ist die Ewigkeit (nHH) seine Grenze ist die Unendlichkeit (D.t),

M: The lifetime of N. is eternity, its limit is everlastingness,

F: The King's lifetime is eternity, his limit is everlastingness

C: C'est la durée de vie d'Ounas que l'éternité-neheh (et) c'est sa limite que l'éternité-djet

A(273-74.60): *My lifetime is Continuity, *my limit is eternity,

吹：ウニスの寿命は永久（ネヘフ）であり、彼の限界は永遠（ジェト）である。

412b. *m sʿḥ.f pn n mrr.f irr.f msḏḏ.f n ir.n.f*

S: in dieser seiner Würde eines “Will er, so thut er, will er nicht, so thut er nicht”,

M: in this his dignity of "If he wishes he does, if he wishes niot he does not,"

F: in this his dignity of: "If he wishes, he does; dislikes, he does not,"

C: en cette prérogative qui est sienne, à savoir : quand il aime, il agit (et) quand il déteste, il ne peut agir,

A(273-74.61): in *my privilege of “He Likes, He Acts; He Dislikes, He Does Not Act,”

吹 : この彼の威厳において：彼が好むなら、彼は行う。彼が嫌うなら彼は行わない。

412c. *imi ḏrw ꜣḫt ḏt r nḥḥ*

S: der im Bereich des Horizontes ist ewiglich bis in Ewigkeit.

M: who is within the boundary of the horizon for ever and ever.

F: even he who is at the limits of the horizon for ever and ever.

C: lui qui réside dans les limites de l’horizon pour toujours et à jamais

A(273-74.62): which is in the Akhet’s limit forever continually.

吹 : 地平線の果てに永久に永遠にいる者が。

413a. *sk bꜣ.sn m ḫt W ꜣḫiw.sn ḫr W*

S: Ihre Seele ist im Leibe des NN., ihre Geister (d.h. Geisteskräfte) sind im Besitze des NN.

M: Behold, their soul (of the gods) is in the belly of N., their spirits are with N.,

F: Lo, their souls are in the King's belly, their spirits are in the King's possession

C: puisque leur ba est dans le corps d’Ounas (et que) leur pouvoir-akh est auprès d’Ounas

A(273-74.63): Since their ba is now in *my belly, their effectiveness is with *me,

吹 : 彼らのバーの力はウニスの腹の中にある。彼らのアクの力はウニスのもとにある。

413b. *m ḥ3-ḫt.f r nṯrw ḳrr.t n W m ḳsw.sn*

S: durch seine Zukost zu den Göttern, das was für NN. ausgekocht worden ist aus ihrem Knochen (d.h. die Suppe).

M: as his soup à la nTr.w cooked for N. from their bones.

F: as the surplus of his meal out of(?) the gods which is cooked for the King out of their bones.

C: constituant son excédent alimentaire par rapport à (celui des) dieux qui cuit pour Ounas au moyen de leurs os

A(273-74.64): as the excess of *my meal with respect to the gods, in that it was boiled for *me with their bones.

吹：神々からの彼の多くの食事、（つまり）彼らの骨からウニスのために調理されたものとして。

413c. *sk b3.sn ḫr W ḫwwt.sn m-ꜥ irw.sn*

S: Ihre Seele ist im Besitze des NN. ihre Schatten sind (weggenommen) von denen, die dazu gehören.

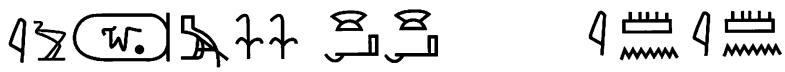
M: Behold, their soul is with N., their shadows are taken away from the hand of those to whom they belong.

F: Lo, their souls are in the King's possession, their shades are (removed) from their owners,

C: (et) puisque leur ba est auprès d'Ounas (et que) leurs ombres sont accompagnées de leur(s) forme(s).

A(273-74.65): Since their ba is with *me, while their shadows are with those they pertain to,

吹：見よ、彼らのバーの力はウニスのもとにある。彼らの影は彼らの所属者たちの手から（離れて）いる。



414a. *iw W m nn ḫ^ḫ^ i.mn i.mn*

S: NN. ist das, was erschienen, was erschienen ist, was bleibt, was bleibt.

M: N. is as that which dawns, which dawns, which endures, which endures.

F: While the King is this one who ever appears and endures,

C: Ounas étant ainsi apparu, (ré)apparu, caché, (re)cache,

A(273-74.66): *I am now in this (state), ever apparent, ever set.

吹 : ウニスは、このしっかりと輝き現れ、しっかりと確固たる者である。

414b. *n sḫm irw irwt m ḫbs*

S: Nicht werden die Thäter von Unthaten zu zerstören vermögen

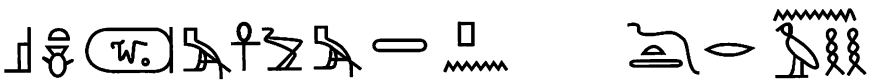
M: The doers of evil shall jot be able to destory

F: and doers of (ill) deeds have no power to destroy

C: les créateurs de ce qui existe ne décideront pas de ravager

A(273-74.67): Those who do deeds will not be able to hack up

吹 : 悪いことを行う者は、破壊する力を持たない。



414c. *st ib W m ^nḫw m tꜣ pn ḏt r nḥḥ*

S: den Herzenssitz des NN. unter den Lebenden in diesem Lande ewiglich bis in Ewigkeit.

M: the favourite place of N. among the living in this land for ever an ever.

F: the favourite place of the King among those who live in this land for ever and ever.

C: (car) l'affection à l'égard d'Ounas est parmi les vivants dans ce pays pour toujoures et à jamais!

A(273-74.67-68): *my mind's place among the living in this world forever continually.

吹 : この地の生者たちのなかにあるウニスの心の場所を。永遠に、永久に。